



京大広報

No. 723

2016.6



医学部附属病院「DMAT」、「DPAT」および「救護班」を熊本に派遣 — 関連記事 本文4651ページ—

目次

桂キャンパスという実験 桂キャンパス担当副理事, 工学研究科長・工学部長 北村 隆行	4642
〈大学の動き〉	
京都大学東京オフィス開所式を開催	4644
米国カリフォルニア州で第2回 UC San Diego —京都大学共同シンポジウムを開催	4644
京都大学, 人間文化研究機構, およびインドネ シア共和国泥炭復興庁による共同声明を发表	4646
国際高等教育院「国際人材総合教育棟」オープ ニングセレモニーを開催	4646
〈寸言〉	
汝自身を知れ 豊田 昌洋	4648
〈随想〉	
雑感: 記憶と忘却 名誉教授 藤重 悟	4649
〈洛書〉	
「教育」と「国際化」 野田 進	4650

〈話題〉	
第2回国際再生リハビリテーションシンポジウ ム in 京都を開催	4651
医学部附属病院「DMAT」、「DPAT」および「救護 班」を熊本に派遣	4651
竹内 譲 厚生労働副大臣が医学部附属病院を視 察	4653
地球環境学堂のベトナム・ハノイ拠点を馳 浩 文部科学大臣が訪問	4654
文化庁が土佐尚子 高等教育研究開発推進セン ター教授を「文化交流使」に指名	4655
宇治キャンパスで「平成28年度新任教職員及び 新入院生等のための安全衛生教育」を開催	4655
〈資料〉	
平成28年度 入学試験諸統計	4656
〈計報〉 4660	

巻頭言

桂キャンパスという実験

桂キャンパス担当副理事
工学研究科長・工学部長 北村 隆行

工学研究科が桂キャンパスに移転を始めてから13年が経過しようとしています(化学系と電気電子系の専攻から順次移転開始。いまだ、移転は未完)。京都盆地を窓いっぱい一望する研究科長室にあるキャビネットの一角は移転前後の委員会ファイルが占めており、ページの隅々にまで当時の研究科の熱い想いが満ちています。

元来、桂キャンパスの新営は、吉田キャンパスの狭隘を解消するために考え出された案でした。案が浮上したときには、竹林の中の候補地に、吉田地区の文化的に成熟した環境や交通・生活の便と比べて、工学の多くの教員が新キャンパス移転に大きな不安を抱いたのも無理からぬことだったと思います。一方、工学各教員は京都大学のキャンパス・スペースの狭隘さは十分に認識しており、大学として現実を打破するための思い切った施策の必要性も理解できました。一般に、改革と称される施策には、必ず長所と短所が同居しています。対象が重大であれば、その相克も大きくなります。解決のための選択(たとえ苦渋の選択であったとしても)に際して、背景にある問題の本質や長短を認識して決断に至ることが京都大学らしさです。片方だけに重心を置いて目前の成果を狙った「傾向と対策」の押し売りは、京都大学らしくありません。物事の本質を見極めようとするのは、京都大学の基礎学理重視にもつながる重要な伝統であると思います。移転が議論された際の書類には、当時の執行部や工学教員の深い悩みが想像される表現が彼方此方にあります。すなわち、桂移転が京都大学らしいプロセスを経て、熱い想いで船出したことが察せられます。

全学からの要請を受けて桂キャンパス新営が決定



される前後から、工学のメンバーを中心とする検討の中に、フロンティアに挑戦する京都大学らしい姿勢と創造力が随所に表れ始めます。例えば、構想を練る段階において、「桂

キャンパス全体が実験の場」との大胆な提議がなされています。すなわち、次の時代の理系キャンパスのあり方を見据えた考察を重ね、その熟慮の結果を実行に移す場であるということです。京都大学の長い歴史において育んできた「自由の学風」は、先入観にとらわれず良いと思うことに積極的に取り組むことですが、当時においては、キャンパスについて従来の考え方へのこだわりや物理的境界条件から手を付けにくいことも数多くありました。例えば、狭隘な実験室、老朽化した設備、未成熟の情報ネットワークだけではなく、留学生寮の整備、そして研究分野の縦割りの壁、……。桂キャンパス新営の検討記録から、単なる狭隘さの克服に留まらず、諸問題について積極的に偏見のない目で見えたトライアルを行おうとする強い意志を感じます。なお、実験の場ですので、完了ということがありません。論理的に考え抜いたことを実行に移すのですが、試練の結果が上手くいっても、たった一歩の前進ということがほとんどです。トライアルですから、退歩までもあり得ます。理想までの道程は遠く、喜びも苦悩も数多いのが現在の姿です。

さて、これらの取組みの遥か先にある目標は何でしょうか。私は、桂キャンパスが京都大学の新しい文化創造の一端を担うことと考えています。大学の

本質は学術にありますから、文化創造のために必要なことは、桂キャンパスが工学に関連する多様な研究を楽しむ場となることです。学術の多様な楽しみ方を模索する実験と言ってもよいでしょう。工学は現代において最もダイナミックに変容しつつある学術ですので、大仕掛けの会議やシンポジウムのみではなく、個々の研究室内外の普段の議論の場を作ることや、多様な専門分野の人々が集って議論すること自体が、特有の文化を創り出すことになります。ここで、工学が現代技術の多様性を背景に、多くの学術分野と多元的な繋がりを有している結節点であることが肝心な点です。工学以外の学術分野、産業界、国内外の地域などの様々なバックグラウンドを有する人々が、工学を基盤に、科学から技術に亘る広範な分野における体系的・論理的な知識・知恵への探求を、芯から楽しんで生活する場が理想です。その雑多なトライアルの過程において、当初計画にある基本インフラの図書館、留学生ハウス、ゲストハウスの整備のみならず、カフェやレストラン等の生活インフラがキャンパスへ溶け込んでゆき、それらが醸し出す雰囲気を含めた全体の場が文化となつてゆくことが夢です。

技術は、歴史的には、失敗の経験を積むことによって知識を獲得し、その対策を重ねることによって発展してきました。例えば、19世紀や20世紀初めには技術的に未熟な鉄道やエネルギー関連の設備・機器が悲惨な事故を経験し、具体的対策を繰り返すことによって信頼性が確立された技術となりました。

一方、工学は、自然法則の探求に関わる自然科学(認識科学)とその法則を用いて人間や社会に有用な機能を引き出す設計に関わる科学(設計科学)から構成される学問です。その役割は、自然を構成する基本的な法則の体系的な知を獲得することと、それを使って環境的・資源的制約や経済性などを考慮しつ

つ、安心安全で人間の夢や希望に応えられる技術の具体的方策を提示することです。普遍的な法則性の理解とともに境界条件に目配りをして社会に価値を作り出す知の体系と言い換えることもできます。現代の技術においては、科学知識・知恵による確かな予測に基づいて物事を設計・作製・維持しようとする傾向が強まっています。これは、我々が接する設備や機器やそのシステムが高機能化のために複雑・大規模化しており、社会が新機器システムの登場当初から高い信頼性を要求することに対応しています。また、新たに発見された自然法則や現象が直ちに機能に結びつくことも多くなっていることにも関連しています。すなわち、技術は経験重視から工学重視へ移行しているのです。これは、技術の基盤となる学理の重要性が格段に高まることを指しており、基礎を重視する京都大学の学風と合致しています。

工学は、science in societyやscience for societyの主要な一角を占めており、工学の知には人間の価値観が本質的に内包されています。現代技術は、経済性や効率性のみならず、環境問題や社会構造を通して人間性や社会性にも関連していることに端的に示されるように、従来の工学の範囲に留まらず多くの分野との協働がその文化を形成するためには不可欠であることは明白です。我々の理想とする桂キャンパスの文化とは、これを先導する考え方を提示することです。桂キャンパスの実験に、全学の「知」が乗り込んできていただくことを期待します。

学術の研究成果報告は、いつも「道半ば」における説明です。同様に、桂キャンパスにおける「実験経過」に関する報告も、道半ばであるのが本来の姿でしょう。その展開について興味を持って見守っていただくとともに、桂キャンパスにおける京都大学らしいチャレンジへのご理解とご支援をお願いします。

大学の動き

京都大学東京オフィス開所式を開催

2016年4月、京都大学東京オフィスが品川から丸の内(新丸の内ビルディング10階)に移転したことに伴い、5月11日(水)に開所式を開催した。当日の出席者は約140名で、学外からは本学卒業生を中心とした国会議員、企業、官公庁の関係者等に多く参加いただき、学内からは山極壽一 総長をはじめ、理事・副学長、監事、部局長等が出席した。

式のはじめに山極総長から「現在京都大学では、高大接続、国際化、産官学連携の事業に積極的に取り組んでおり、学生や研究者の交流を一層活発化させて国際的なプレゼンスを高め、イノベーションにつながるような研究を推進していくということをやっています。東京駅の真ん前にオフィスを構え、多くの産官学連携を呼び込みたい」と挨拶があった。



挨拶する山極総長

当日はオフィス内を自由に観覧できる形式をとり、会議室の予約方法等について、スタッフに質問する方が多くいた。

京都大学では、この移転により首都圏での戦略的な情報発信・情報収集を一層強化し、本学のプレゼンス向上に努めていきたいと考えている。



東京オフィス受付にて左から、阿曾沼理事、稲葉理事・副学長、山極総長



左から、土屋文部科学事務次官、稲葉理事・副学長、山極総長

(総務部(渉外課))

米国カリフォルニア州で第2回 UC San Diego ー京都大学共同シンポジウムを開催

カリフォルニア大学サンディエゴ校(以下UC San Diego, アメリカ・カリフォルニア州ラ・ホヤ、サンディエゴの北隣)にて、第2回UC San Diego ー京都大学共同シンポジウム(第23回京都大学国際シンポジウム)を3月14日(月)から16日(水)に開催した。

1日目の全体セッションは、Sandra A. Brown UC San Diego副学長、Pradeep K. Khosla 同学長、湊 長博理事・副学長、稲葉カヨ理事・副学長の挨拶で始まった。

次に2日目に開催される3つの分科会セッション①「がんと創薬Cancer & Drug Development」、②「幹細胞の生物学的意義と臨床適用Stem Cells in Biological Discovery and Clinical Application」、③「先進エネルギー研究Advanced Energy Research」



左から順に、稲葉理事・副学長、湊理事・副学長、山中教授、Roger Y. Tsien教授、Pradeep K. Khosla学長、Sandra A. Brown副学長、Suresh Subramani副学長

の各々について、UC San Diegoと京都大学の双方から概要紹介が行われ、また各分野の研究施設や代表的な研究結果が紹介された。

続いて、ノーベル賞受賞者のRoger Y. Tsien UC



Roger Y. Tsien教授の基調講演



山中伸弥教授の基調講演

San Diego教授と山中伸弥 iPS細胞研究所長・教授の基調講演が行われ、会場は300余名の聴衆で満員となり、分子イメージングとiPS細胞研究で世界を牽引する研究とその応用に対する研究者・学生・患者を含む参加者の関心の高さがうかがえた。夕刻には、歓迎レセプションが開かれ、弦楽四重奏をバックに、京都大学の若手研究者8名を含む両校研究者間で意見交換と親睦が深められた。

2日目は、3つの分科会に分かれて研究発表が行なわれた。

がんと創薬セッションでは、Tsien 教授による最新の分子イメージング研究の講演に続いて、腫瘍内微小環境、炎症反応、免疫療法、腎臓の分子生物学などについて共同研究を含む研究成果の発表があった。

幹細胞セッションでは、山中教授のiPS細胞研究の最前線の紹介講演に続いて、試験管内疾患モデル、遺伝病研究と治療、細胞・組織の分化と行動、細胞製剤治療におけるiPS細胞を含む幹細胞の利用について多くの先進的な研究が紹介された。

先進エネルギーセッションでは、太陽エネルギーとエネルギー材料、エネルギー貯蔵、超高速現象、核融合研究、再生可能エネルギーの現状と将来、などについて活発な研究発表と意見交換が行なわれた。

3日目には、サンフォード再生医療コンソーシアム (Sanford Consortium for Regenerative Medicine) とUC San Diego内の電力スマートグリッドおよび先進エネルギー分野研究室への見学ツアーが行われると共に、個々の研究者間でも、いくつかの共同セミナーや共同研究への協議の場が設けられた。

2014年2月のMOU(大学間学術交流協定)の締結、2015年3月の京都における第1回共同シンポジウムの開催、そして今回の第2回共同シンポジウムを契機として、両校間ではいくつかの新しい研究および教育連携が開始されており、両校が掲げる社会への貢献が今後さらに進展することが期待されている。

※本シンポジウムの記録と報告は、

<http://www.oc.kyoto-u.ac.jp/symposium/kyoto-ucsd-symposium2016/> (日本語)

<http://www.oc.kyoto-u.ac.jp/symposium/kyoto-ucsd-symposium2016/en/> (英語)

をご覧ください。



両校の参加者

(企画・情報部(国際交流課))

京都大学，人間文化研究機構，およびインドネシア共和国泥炭復興庁による共同声明を公表

4月25日(月)，本学と人間文化研究機構は，インドネシア共和国泥炭復興庁とともに，泥炭火災とこれによってもたらされる煙害や二酸化炭素の大量排出を防ぐべく，さらに荒廃泥炭地の復興と地域住民生活の再生に向けて，今後協力して研究してゆくとする共同声明を公表した。

2015年7月から11月のインドネシア泥炭火災由来の温室効果ガス排出は，2013年の日本の年間CO₂排出量を超えると推定されている。煙害による健康被害はインドネシアだけでも約4,300万人にのぼり，50万人以上が上気道感染症などにかかっているといわれている。越境汚染も深刻で，近隣諸国との国際問題となっている。

インドネシア政府は，この状況をきわめて重く受け止め，一時的な経済的利益よりも，環境に配慮した長期にわたる泥炭地の活用を図るよう大きく政策を転換した。2016年1月には泥炭復興庁を創設し，

国家をあげて，荒廃した泥炭地を修復する事業を行うことにした。今後，2020年までの5年間に，200万ヘクタールの乾燥し劣化した泥炭地の再湿地化と，そこにおけるアグロフォレストリーや漁業による持続的な「パルディカルチュア」の展開を目指している。

本学は，1970年代より東南アジア泥炭地研究を進めてきた。近年は現地の大学と協力した文理融合および実践研究によって多大な実績をあげている。これら研究成果の蓄積は，同じく京都に所在する総合地球環境学研究所(人間文化研究機構)のプロジェクト「熱帯泥炭地域社会再生に向けた国際的研究ハブの構築と未来可能性への地域将来像の提案」の基盤となっている。本学と人間文化研究機構は，自然科学的研究だけでなく，土地権をめぐる紛争など社会経済面の研究も含めた，文理融合による実践研究をさらに強力に推し進めるべく，インドネシア泥炭復興庁とともに，今回の声明を公表した。



左から，立本成文 人間文化研究機構長，山極壽一 総長，Nazir Foead インドネシア共和国泥炭復興庁長官



記者会見の様子

(東南アジア研究所)

国際高等教育院「国際人材総合教育棟」オープニングセレモニーを開催

国際高等教育院では，4月23日(土)，国際人材総合教育棟の竣工を記念して，オープニングセレモニーが開催された。セレモニーには，学内外から約80名が出席し，国際人材総合教育棟の竣工を祝った。

セレモニーでは，村中孝史 国際高等教育院長から，平成25年4月の国際高等教育院設置以来取り組んできた，本学の教養・共通教育の改革について紹

介する内容の式辞があり，続いて山極壽一 総長から，国際人材総合教育棟は，「京都大学の改革と将来構想(WINDOW)」の重点戦略として挙げている「異文化を理解し国際的に活躍できるグローバル人材の育成」，「対話を根幹とした自学自習を促進するために学生主体の多様な学びを支える教育学習環境の整備」を実現するものである，と挨拶があった。



式辞を述べる村中院長



挨拶する山極総長



祝辞を述べる常盤局長



祝辞を述べる松本理事長(前総長)

また、来賓として出席された常盤 豊 文部科学省高等教育局長からは、「京都大学の国際化推進の拠点とも言える国際人材総合教育棟の竣工を契機に、社会からの期待に応え、京都大学が、我が国の高等教育の国際競争力向上を牽引されることを期待するとともに、その支援に最善を尽くしたい」と祝辞が、松本 紘 国立研究開発法人 理化学研究所理事長(前総長)からは、国際人材総合教育棟の構想、実現までの経緯に、予算の獲得に至るエピソードもまじえて祝辞が述べられた。

引き続き、山極総長、常盤高等教育局長、松本理事長(前総長)、北野正雄 理事・副学長、佐藤直樹 理事・副学長、村中 国際高等教育院長によるテープカットの後、施設見学が行われた。参加者は、国際高等教育院附属国際学術言語教育センター(i-ARRC)が行う国際言語実践教育プログラムを実施するための、コンサルティングカウンター、カンパセーションルーム、スピーキングコーナー、TOEFL iBTを学内で受験できるCBTルーム、ポスターセッションやデジタルサイネージシステムを用いて動画教材を表示できるマグネットコーナー等を

見学した。マグネットコーナーでは国際高等教育院教員によるポスターセッションも行われ、平成28年度からの教養・共通教育の改革や、i-ARRCで開発された自習教材「国際言語実践教育システム(GORILLA)」についての説明に参加者は熱心に聞き入っていた。



テープカットの様子



施設見学の様子



ポスターセッションの様子

(国際高等教育院)

寸言

汝自身を知れ

豊田 昌洋



皆さんこんにちは、昭和32年卒業の豊田です。酸素メーカーに職を得て59年、国内産業の変遷を目の当たりにしながら業態も変化し、今ではユニークさが売り物のコングロマリットとなった会社の経営を預かっています。永遠の成長を不変のテーマとして仕事を続けています。今日はこの場をお借りして、振り返れば半世紀を越えた企業人生活の立場から思いのままを綴ってみることにしました。あ、その前に本学での最初の思い出をひとつ記しておきましょう。それは入学直後の学舎が吉田分校かと思いきや宇治分校だったことです。大きな期待を胸にした青年の小さな落胆でした。県神社の氏子さんの家に下宿できたことは楽しいひと時であったことは付け加えなければいけませんが、ともかくも到るところ青山と心得、法曹をこころざし真摯に学んだものでした。

さて主題です、「汝自身を知れ」とはあまりに人の能く知るところで、高等学校時代に真理への道しるべだと学びました。人類は絶えず何がしかこの種の命題に取り組み続け、数多の箴言やフレーズを生み出してきました。学問の府の広報誌に持ち出すには勇気のいる書き出しですが、そうした知恵の一言、そのひとつに、私が京都大学時代に出会い、以後私のなかに胚胎し、今や全く私の行動指針となった大切な一言があります。それは瀧川幸辰総長からいただいた「ただ酒は飲むな」という卒業式での告辞の一節です。近江の小学教員の子として育てられた身には、違和感も抵抗もなく、社会人の当然のルールとして、そのときは極々素直に受け取ったものです。「汝の道を進め」と対にして論された告辞は、日頃の教壇での教育に対する厳しい接し方、教える者と教わる者との敬愛のコミュニケーション、これらとともにまさに瀧川先生の人柄と信念が、平易に放たれた瞬間でした。将来のこの国の指導者に対して、人間の真実を簡明率直に語られた至言です。少し後年

になりますが東大の大河内総長のやせたソクラテスが大いに話題になりましたが、こちらはその時代が求めた警世の一句だったのでしょね。

教育現場における瀧川先生をいまも鮮明に思い出すことができます。時計台下にあった大きな階段状の法経第一教室での出来事でしたね。講義が始まって5分ほど経過した頃ドアを押し開けた学生3人に向かって瀧川先生、ばか者、そこに立ち居れ！と裂帛の啖呵。罪のないわれわれも思わず姿勢を正してしまったものでした。

総長の言葉の真意が私の倫理観の根っこを形成し始めるまでにはかなりの時間を要し、会社で部下を得て、まがりなりにもリーダーとなった頃ではなかったでしょうか。人を使い、人を守り、そして人から見られるリーダーの要諦を語っていたと、ようやく得心し身に付くことになるのです。いま、瀧川先生のように分かり易く語る力はありませんが、いえば行動的倫理観とでもしておきましょうか。先生の言うところの真実を、こころの中に仕舞い置くのではなく、私自身の行動の規律とした結果です。

近年、世の中薄い紙片があちこちで舞うように妙にフワフワとしているように感じるのは私だけでしょうか。国民の幸せや国の進路を信念とともに語ることを忘れた政治、無私とは遠いところで企業活動の大義を踏みにじる経営、頑迷固陋の解釈を押しつけ社会の木鐸という言葉を自ら死語としてしまったマスコミジャーナリズム、極めつけは、ステレオタイプの言葉を操って専門性と良識を売り捌く評論。いずれも社会のリーダーたる立場の人達が、自らの人間としての器量を養い損なった結果なのでしょうね。

総長告辞では、自主性を持って、信念を持って、自分の能力にあった自分のペースで歩めとも語られ、リーダーとして磨かれるべき人間の真実を明快にしてくれています。私自身は、学問の府でこのように知りえた叡智を、長い時間をかけて行動の規律として実践して来ました。

人生は長い、学ぶべきときに学び、時が来たなら大いに行動する、

みなさんに、贈りたい一言です。

(とよだ まさひろ エア・ウォーター株式会社代表取締役会長・CEO 昭和32年法学部卒業)

随想

雑感：記憶と忘却

名誉教授 藤重 悟

数理解析研究所を定年退職し4年が過ぎて年金生活に入っているが、無給の特任教授として研究所(数理解析研究所別館)で現在も研究を続けられることに心より感謝している。あと2年間の科学研究費補助金の支援で、引き続き現役の時と同じような研究環境の下での研究生活と共に国内外の研究者達との研究交流を楽しんでいる。

ところで、このゴールデンウィーク中に日常と違う生活パターンであったことにも起因するのだが、まったく不覚にも、連休明けの知人の研究室来訪をすっかり忘れてしまい、知人には大変申し訳ないことをしてしまった。手帳に知人の来訪予定日時を書いていたのであるが、手帳のような補助記憶もアクセスしなければその役を果たせない。記憶と忘却のせめぎ合いである。そのような記憶と忘却について日頃思っていることの一部を気の向くままに述べたいと思う。

私は数理最適化の研究をしてきたが、補助記憶ということでは、興味ある論文を読んだらファイルに収めて棚に並べておくのが、長年の重要な作業であった。どの論文がどのファイルにあるかはカードに記入して著者名から論文の検索ができるようにしておいて、活用していた。ところが、最近では(と言っても十数年前から)、ファイルの作成をほとんど止めてしまった。学术论文の電子化や電子ジャーナルの登場と効率的な文献検索の普及により、必要な時に必要な論文に容易にアクセスすることができるようになったからである。定年退職を機に、棚いっぱいのファイルをほとんどすべて廃棄したが、現在の研究に全く影響していない。これも、私が京都大学図書館の電子ライブラリを利用できるからであり、有り難く思っている。手元のファイルは廃棄したが、



このような学術文献データの大部分は出版社によって支えられており、企業経営の状況変化によっては文献データベースの維持が危うくなって、補助記憶媒体としての機能が保たれなくなるのではないかと、という心配がある。著作権の問題もあるが、人類の知の蓄積と世代を繋ぐ知の連鎖を断ち切らないために、堅牢で安定した情報保持と公開のメカニズム(装置)が望まれる。

人間にとっては、記憶も忘却もそれぞれが功罪の両面を持っている。すべてを記憶する人物が登場するテレビドラマもあったが、多少の忘却は人類の安定した持続のために良いことである。しかし、歴史的負の遺産の記憶は、国際紛争の火種となり、今も世界の至る所で緊張関係を生じさせている。負の遺産は忘却したいという誘惑に襲われるのであろうが、これらの緊張関係において相互に相手側の気持ちを理解する上で、負の遺産の記憶を‘適切に’保持することは重要であり、その相互理解の上に共存関係を築くことができる。また、有形、無形の伝統文化や芸術は記憶の連鎖の上に存続する。そのために、ITのデジタル技術を始め色々な補助記憶「装置」が重要である。

人間関係についても、例えば、家族愛は記憶の共有によって維持され高められる。思い出や懐かしさは、記憶の上に存在する。認知症による認識力と記憶の消失は、双方向の家族愛の態様を一変させてしまう。一研究者としても、認知症(記憶障害)は脅威であるが、そうならない限りいつまでも研究を続けたいと思っている。私の研究分野で90歳を過ぎてもしゃきっとして国際会議で講演を続けている著名な研究者がおられるのは、心強い。私もそうありたいと思いながら定年退職後の研究生活を楽しんでいる。この年になると、同時並列的な仕事の処理は難しくなるし、補助記憶媒体の使用が有効である。こういう言い方をすると語弊があるが、若い人たちとの共同研究も、ある側面では、有能な補助記憶の活用なのかも知れない。

(ふじしげ さとる 平成24年退職 元数理解析研究所教授 専門は数理最適化)

洛書

「教育」と「国際化」

野田 進



まず、私自身についての紹介をさせていただきます。私は、現在、工学研究科電子工学専攻で、光子電子工学分野の教育研究を担当しています。光と物質の相互作用や、光を自在に操ることのできるフォトニック結晶と呼ばれる光ナノ構造体に関する教育研究を行っています。本稿では、日頃から思っている大学における「教育」および「国際化」について私見を述べさせていただきます。

最初に、「教育」について述べたいと思います。「授業を行うことこそ、教育であり、授業にこそ力を入れるべき」ということをおっしゃる方々がいます。でも、本当にそうでしょうか。私自身の学生時代を振り返ってみると、もちろん素晴らしい授業もあったのですが、どうしても受け身になり、能動的になるには限界があったように記憶しています。特に、工学部では、3回生になったときに、急に専門科目が増え、朝から晩まで授業ばかり受け、また学生実験と呼ばれる、教科書の指示書に従った実験に追われていました。どうも、勉強したことの实感が得られず、悶々とした日を過ごすことも多かったように覚えています。転機が訪れたのは、4回生になって、研究室に配属され、研究を開始したときでした。日々の研究生活を送って初めて、授業で習ったことの真の意味が分かり、また、自ら計画を立て、未知なることに取り組み、そこでいろいろな文献を自ら読み勉強する、本当にわくわくしました。研究室の先生方や、先輩方と気兼ねなくディスカッションも出来、ああ、これが本当の大学での勉強だとパッと目の前の霧が晴れたように感じたのを今でも鮮明に覚えています。つまり研究と結びついて初めて「教育」の意味が出ているのを感じました。

また、教員として、教える方の立場から考えた場合も、研究室に配属された学生さんと研究会やミーティング、日々の真剣なディスカッションを通じて、学生さんが真に生きた知識と考え方を身に付けていくのを感じます。また、授業を行う場合においても、その分野の研究活動を十分に行い、その基礎が自分自身の血となり肉となっている状態で授業を行う場

合と、そうでない場合(特に自分が若かった頃)の授業を比較すると、授業の迫力が全く違うように感じます。研究活動に裏打ちされることにより、血の通った教育が出来るように思います。また、大げさかも知れませんが、真の教育者は真の研究者と究極的に同一であるのではと思います。すなわち、教育と研究はまさに表裏一体ではないかと思います。(なお、念のために付け加えますと、その場合でも、授業の質を上げるための授業改善活動は大変重要かと認識しています。)

以上を踏まえ、若い先生方へ申したいことは、日々の研究活動によって自身の中に、生きた血と肉をしっかりと蓄積し、その生きた知識を熱く学生に語りかけてほしいと思います。一方、学生さんへは、授業では、単に、教科書だけを勉強するのではなく、また漫然と授業を聞くのではなく、折に触れ、先生方が発する生き様を感じ取ってほしいと思います。また、研究室へ配属されたときこそ、真に生きた学問が出来ます。周りの先生方、先輩、さらに同級生、さらに後輩と是非、いろいろ議論を戦わせてほしいと思います。

続いて、「国際化」について、述べさせていただきます。最近、大学ランキングの観点等から、授業の英語化が叫ばれます。このこと自体は、大変素晴らしいと進めるべきことであるかと思えます。ただ、授業を英語化しただけで、世界各国から学生を集めることが出来るのでしょうか。重要なことは、各分野における研究活動(および、それを通じた教育)を活発に行い、世界へ発信することにより、世界各国の若者に日本の大学で勉強してみたいという気にさせることではないかと思えます。これより、自然と世界各地から優秀な学生さんが集まり、世界拠点として発展していくのではと思います。形式的な国際化ではなく、真に、この研究なら、京都大学で研究しなければという分野をどんどんと広げ、そして真の国際化を図る、この不断の努力が、大学全体に問われているのではと思います。

以上、私見を述べましたが、限られた紙面の都合上、十分に意図が伝わるか甚だ不安ですが、京都大学が、これから益々発展していくことを祈念して拙文の結びとさせていただきます。

(のだ すすむ 工学研究科電子工学専攻教授(兼：工学研究科附属光・電子理工学教育研究センター・センター長) 専門はフォトニック結晶、フォトニックナノ構造、光子電子工学)

話題

第2回国際再生リハビリテーションシンポジウム in 京都を開催

医学研究科人間健康科学系専攻は、iPS細胞研究所および医学部附属病院と合同して第2回国際再生リハビリテーションシンポジウムin京都を3月25日(金)・26日(土)に開催し、17名の国外参加者を含む計75名が参加した。

本国際シンポジウムの目的は、研究者、医師、リハビリテーション専門職が一堂に会し、再生医療を安全で効果的に実施するためのリハビリテーションについて議論を深めようとするものである。

シンポジウムは黒木裕士 医学研究科教授の開催趣旨の説明に続き、中村雅也 慶應義塾大学医学部教授、ヘザー・ロス ブレノー大学健康科学カレッジ准教授、ランディー・トロンボワー エモリー大

学医学部助教、櫻井英俊 iPS細胞研究所准教授、田代祥一 慶應義塾大学医学部助教、南角 学 医学部附属病院理学療法部技師長が講演を行い、最後にパネルディスカッションを行った。さらに、本学における再生医療研究施設の見学(iPS細胞研究所、医学部附属病院先端医療機器開発・臨床研究センター、同リハビリテーション部)およびトロンボワー助教によるウェアラブル技術を用いたリハビリテーションのデモンストレーションを行った。日本ではまだまだ馴染みのない再生リハビリテーションという新しいテーマに活発な議論が交わされ、シンポジウムは盛会のうちに終了した。



講義を行う中村教授



講義を行う櫻井准教授



トロンボワー助教によるウェアラブル技術を用いたリハビリテーションのデモンストレーション



再生医療研究施設の見学ツアー参加者

(大学院医学研究科)

医学部附属病院「DMAT」、「DPAT」および「救護班」を熊本に派遣

医学部附属病院では、京都府から要請を受け、熊本地震の被害にあわれた人々の支援を行うため、4

月16日(土)から20日(水)までDMAT(災害派遣医療チーム)の派遣を行った。今回派遣されたのは、下

戸学 初期診療・救急科医師，播摩 裕 同科医師，平松八重子 看護師長，篠浦千佳 副看護師長，中村正次 医療サービス課長の5名。

同チームは，熊本市内外で被災者の治療や患者搬送等を行った。また，今回の派遣隊の中には東日本大震災の際にもDMATとして現地で災害医療に従事したメンバーが参加しており，当時の経験を生かしたスムーズな活動が行えた。

帰院後は，DMATによる活動報告会を開催し，院内から100人以上が参加するなど，各スタッフの関心の高さがうかがえた。



DMAT隊員による活動報告を聞く院内スタッフ

また，5月6日(金)から12日(木)と5月26日(木)から6月1日(水)の間，京都府DPAT(災害派遣精神医療チーム)も派遣された。DPAT第3陣として鶴身孝介 デイ・ケア診療部医師，畠田裕子 精神科神経科精神保健福祉士，久米章也 同看護師，林 史明(京都府職員)の4名，第7陣として，磯部昌憲 脳病態生理学講座医師，森口公裕 人間健康科学系専攻看護師，伊藤有里 臨床心理士，福本大吾(京都府職員)の4名を派遣し，菊池市内などで活動を行った。

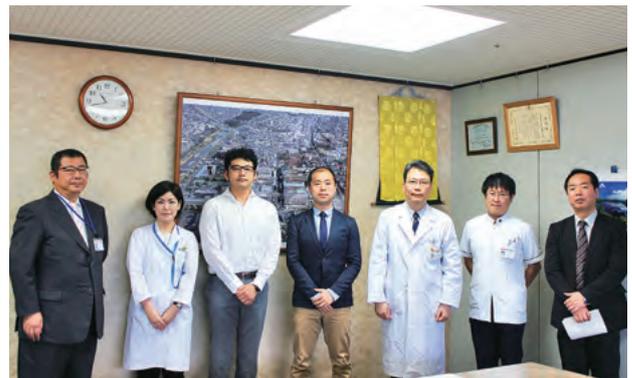
派遣前には壮行会を行い，稲垣暢也 病院長からは，長期化する避難生活で疲弊した被災者に寄り添い，少しでも皆さんの力になれるよう頑張ってきてほしい旨の激励があった。派遣者からは，「京大病院で培った経験を活かし，被災した人々の心のケアを行っていききたい。また，今回の活動で培った経験を京大病院の各スタッフにフィードバックして，今後の災害医療に備えていききたい。」との抱負があった。

さらに，京都府救護班第4班と第5班の派遣も決定し，5月6日(金)には京都府健康福祉部長をはじめとする京都府の関係者が出席して壮行会が開催された。

壮行会では，稲垣病院長から各派遣者に対して被災者への支援に関して期待の言葉がかけられるとともに，松村淳子 京都府健康福祉部長からは，刻一刻と状況が変化する被災地の声に耳を傾け，ニーズに沿った支援活動を行ってほしい旨の要請があり，各派遣者はこれから始まる救護活動に対して抱負を述べた。



派遣される京都府DPAT(第3陣)



派遣される京都府DPAT(第7陣)

救護班第4班は，西賀雅隆 循環器内科医師，兵頭富貴子 看護師，浦田美樹 看護師，山際岳朗 薬剤師，一谷 諒 業務調整員(京都府職員)で構成され，5月7日(土)から13日(金)の間，現地で避難者等への巡回診療などを行った。

第5班は，牟田 優 消化器内科医師，坂口もも



京都府救護班第4班・第5班と病院執行部
ならびに京都府健康福祉部の皆さま

子看護師，鈴木 敦 看護師，川田将義 薬剤師，山本 博 業務調整員(京都府職員)で構成され，同じ

く第4班に引き続き5月12日(木)から18日(水)までの間，救護活動を行った。



各派遣者に対して期待の言葉を贈る稲垣病院長と松村部長

(医学部附属病院)

竹内 譲 厚生労働副大臣が医学部附属病院を視察

5月16日(月)，竹内 譲 厚生労働副大臣が医学部附属病院先端医療機器開発・臨床研究センターを視察に訪れた。

当日は，稲垣暢也 医学部附属病院長，松田秀一副病院長(教育・研究・地域連携担当)，一山 智副病院長(医療安全担当)，清水公治 先端医療機器開発・臨床研究センター医療機器開発支援室長，松村由美 医療安全管理室長の出迎えを受けた後，先端医療機器開発・臨床研究センターで実施している様々な研究プロジェクトの概要や研究成果ならびに当院の医療安全管理体制について説明を受けた。

その後，同センターにおいて内閣府プログラムImpactの一環としてキヤノン株式会社と共同開発中の光と超音波によってがんの新生血管の状態を可視化することができる「光超音波マンモグラフィ装

置」の見学を行った。竹内副大臣は，戸井雅和 乳腺外科長から臨床画像の説明を受けながら，3D画像で血管の状況を確認された。



光超音波マンモグラフィ装置の説明を受ける竹内厚生労働副大臣



先端研究や医療安全について意見交換を行う稲垣病院長と竹内副大臣

(医学部附属病院)

地球環境学堂のベトナム・ハノイ拠点を訪 馳 浩 文部科学大臣が訪問

地球環境学堂がベトナムのハノイ理工科大学環境理工学部内に設置するハノイ拠点(京都大学-ハノイ理工科大学環境学研究教育プログラム)に、5月3日(火)、馳 浩 文部科学大臣ほか文部科学省関係者6名、在ベトナム日本国大使館から柳 淳 次席公使ほか1名が訪問された。

京都大学からは藤井滋穂 拠点共同代表・地球環境学堂教授ほか1名が、ハノイ理工科大学からはHoang Minh Son ハノイ理工科大学長ほか、本学への留学経験者11名を含む計41名が現地で大臣訪問を歓迎した。また、遠隔テレビ会議システムを通じて、吉田キャンパス、さらには文部科学省概算要求事業(特別経費・機能強化)「海外サテライト形成によるASEAN横断型環境・社会イノベーター創出事業」

で協働するベトナムのフエ大学、ダナン大学、およびタイのマヒドン大学からの計27名も歓迎行事に参加した。

大臣一行の拠点実験室および事務室の見学に続き、環境理工学部会議室にてNghiem Trung Dung 拠点共同代表・環境理工学部長のあいさつ、藤井拠点共同代表による拠点活動の紹介、および3名の京都大学留学経験者からの留学経験紹介が行われ、Huynh Trung Hai 前拠点共同代表・科学技術部長から、これまでの日本政府の支援に感謝の意が表された。訪問の最後には、馳大臣から京都大学およびハノイ理工科大学の共同活動の益々の発展を期待する激励の言葉をいただいた。



馳大臣に拠点オフィスを紹介する藤井教授



Dung ハノイ拠点共同代表からの歓迎の花束贈呈



馳大臣によるスピーチ

(大学院地球環境学堂・学舎)

文化庁が土佐尚子 高等教育研究開発推進センター教授を「文化交流使」に指名

文化庁は平成15年度より、文化に携わる芸術家、文化人、研究者等を諸外国へ派遣する「文化交流使事業」を実施している。

今年度、土佐尚子 高等教育研究開発推進センター教授が「文化交流使」に指名され、4月18日(月)に国立新美術館で指名書交付式が行われた。



交付式後の記念撮影の様子
左から、佐藤可士和氏(クリエイティブディレクター)、佐野文彦氏(建築家)、土佐尚子氏(京都大学教授)、宮田亮平氏(文化庁長官)、藤間蘭黄氏(日本舞踊家)、柳家さん喬氏(落語家)、山田うん氏(振付家)

(高等教育研究開発推進センター)

宇治キャンパスで「平成28年度新任教職員及び新入院生等のための安全衛生教育」を開催

宇治キャンパスでは、4月28日(木)、宇治おうばくプラザ きはだホールにおいて、「平成28年度 新任教職員及び新入院生等のための安全衛生教育」を開催した。

この講習は、安全に職務や研究を行うために必要な安全衛生に関する知識を修得することを目的として、新たに宇治キャンパスで実習・研究を実施する学部4回生、大学院生及び新規配属の教職員等を対

象に毎年実施しているものである。

今年度宇治事業場総括安全衛生管理者に就任した渡辺隆司 生存圏研究所長による開会の挨拶に始まり、『宇治事業場の安全衛生』、『日々の安全と危険予知等について』、『喫煙問題』、『健康管理・応急手当』、『生物実験および放射線取扱』、『物理実験および計算機関係』、『化学物質管理および実験系廃棄物管理』、『実験排水』に関する説明があり、計255名(学生184名、教職員71名)の受講者は熱心に耳を傾けていた。



宇治事業場総括安全衛生管理者渡辺教授による開会の挨拶



会場の様子

(宇治地区事務部(総務課))

資料

平成28年度 入学試験諸統計

1. <一般入試> 募集人員・志願者数・合格者数・入学者数等調

学部・日程		募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入 学 者 数 入 辞 退 者 数	追 加 合 格 者 数	入学者数
総合人間学部	前期(文系)	62 ^人	283 ^人	217 ^人	215 ^人	65 ^人			119 ^人
	前期(理系)	53	235	187	183	54			
文学部	前 期	213	614	614	600	216			216
教育学部	前期(文系)	45	144	144	142	47			57
	前期(理系)	10	39	39	36	10			
法学部	前 期	300	821	821	805	312			312
経済学部	前期(文系)	180	478	478	464	190			215
	前期(理系)	25	132	132	128	25			
理学部	前期	306	845	832	829	310			310
医学部	前期	244	621	605	590	260	9	2	253
薬学部	前期	80	218	218	208	84			84
工学部	前期	951	2,732	2,731	2,688	945	4		941
農学部	前期	297	867	867	858	310			310
合 計		2,766	8,029	7,885	7,746	2,828	13	2	2,817

*工学部の入学者は、外国人留学生を対象とした国際コースの入学者13人を除く。

[外国学校出身者のための選考の実施結果 (外数)]

学 部	募集人員	志願者数	第1次選考合格者数	受験者数	合格者数	入学者数
法学部	10人以内	21 ^人	17 ^人	8 ^人	4 ^人	4 ^人
経済学部	10人以内	22	16	5	5	5

<特色入試> 募集人員・志願者数・合格者数・入学者数等調

学部・学科・専攻		募集人員	志願者数	倍率	第1次選考合格者数	第2次選考受験者数	欠席者数	第2次選考合格者数	最終選考合格者数	辞退者数	入学者数	
総合人間学部		5 ^人	29 ^人	5.8 ^倍	29 ^人	29 ^人	0 ^人	- ^人	5 ^人	0 ^人	5 ^人	
文学部		10	40	4	9	9	0	-	7	0	7	
教育学部		6	25	4.2	12	12	0	7	5	0	5	
法学部(後期日程)		20	324	16.2	324	130	194	-	22	1	21	
経済学部		25	77	3.1	61	60	1	-	25	0	25	
理学部		5	59	11.8	59	59	0	5	5	0	5	
医学部	医 学 科	5	5	1	5	5	0	-	1	0	1	
	人間健康科学科	看護学専攻	10	13	1.3	13	13	0	10	1	0	1
		理学療法専攻	3	7	2.3	7	6	1	4	2	0	2
		作業療法専攻	3	2	0.7	2	2	0	2	2	0	2
薬学部	薬 科 学 科	3	2	0.7	2	2	0	2	0	0	0	
工学部	地 球 工 学 科	3	0	-	-	-	-	-	0	0	0	
	電 気 電 子 工 学 科	5	12	2.4	-	-	-	-	3	0	3	
	情 報 学 科	2	1	0.5	1	1	0	1	1	0	1	
	工 業 化 学 科	若干	0	-	-	-	-	-	0	0	0	
農学部	食料・環境経済学科	3	20	6.7	10	10	0	-	3	0	3	
計		108	616	5.7	534	338	196	31	82	1	81	

2. <一般入試> 合格者 最高点・最低点（総点）調

学 部		日 程	満 点	総 点			
				最 高 点	最 低 点	平 均 点	
総 合 人 間 学 部		前 期	(文 系)	800 点	596.41 点	488.41 点	521.20 点
			(理 系)	800	583.00	433.50	469.88
文 学 部		前 期		750	591.11	478.11	506.68
教 育 学 部		前 期	(文 系)	900	636.63	540.06	580.66
			(理 系)	900	608.96	516.75	550.56
法 学 部		前 期		820	644.24	507.74	540.13
経 済 学 部		前 期	(文 系)	800	625.15	510.80	543.40
			(理 系)	900	669.28	547.68	595.07
理 学 部		前 期		1,200	990.45	720.60	792.44
医学部	医 学 科	前 期		1,250	1,078.50	911.30	968.75
	人間健康科学		看護学専攻	1,200	758.40	619.03	671.42
			検査技術科学専攻	1,000	623.75	508.65	556.11
			理学療法学専攻	1,200	865.26	651.76	719.06
			作業療法学専攻	1,200	785.10	578.43	671.74
薬学部	薬 科 学 科	前 期		950	697.90	572.30	613.95
	薬 学 科		950	706.75	559.16	616.27	
工学部	地 球 工 学 科	前 期		1,000	717.30	566.68	594.86
	建 築 学 科		1,000	745.26	576.70	615.82	
	物 理 工 学 科		1,000	800.78	610.11	656.95	
	電 気 電 子 工 学 科		1,000	786.95	571.06	613.50	
	情 報 学 科		1,000	817.88	599.85	650.58	
	工 業 化 学 科		1,000	739.25	565.06	603.12	
農 学 部		前 期		1,050	852.43	658.46	704.79

(備考) 1. 法学部・経済学部の外国学校出身者のための選考を除く。
2. 総点については、前期合格発表時のものである。

3. <一般入試> 志願者・入学者 出身高校等所在都道府県別調

上段…志願者数
下段…入学者数

都道府県	学 部											計
	総合人間	文	教育	法	経済	理	医		薬	工	農	
							医学科	人間健康科学科				
北海道	84	72	2	113	155	207	62	31	32	4021	156	13053
青森	22			21		41				21	11	115
岩手		2		31		31	1			12	12	123
宮城	42	51	1	81	92	93			11	147	74	5818
秋田	21	11		22		21				2		95
山形	11	21		31		41		1		31		144
福島	51	43	1	21	41	52		11	14	41	128	88
茨城	122	31	31	103	23	63	11	31	31	168	818	6718
栃木	42	31	11	13	11	66	11	11		66	630	44
群馬	62	125		42	33	51	11	13	311	44	5017	
埼玉	114	126	67	163	123	152	12	31	512	126	14436	
千葉	114	155	32	94	164	166	22	21	295	11115	3535	
東京	7617	8026	184	7524	6218	8629	247	114	2035	17626	7426	702191
神奈川	152	198	115	175	318	368	63	92	622	6717	279	24469
新潟	61	82	1	84	11	127		44		114	122	5222
富山	22	62		62	41	21		22	176	44	444	1515
石川	21	93	22	141	33	113	34	41	2413	136	8633	
福井	22	61	1	123	52	62		22	26	246	62	6617
山梨	11			32	51	62	1		13	33	23	66
長野	61	133	31	51	73	112	11	21	176	81	7419	
岐阜	74	103	31	113	72	91	15	21	5514	103	12035	
静岡	91	138	31	126	63	166	21	73	363	631	15166	
愛知	225	3716	82	4819	3817	6523	219	147	1710	21393	4521	528222

都道府県	学 部											計
	総合人間	文	教育	法	経済	理	医		薬	工	農	
							医学科	人間健康科学科				
三重	5	113		154	74	215		54	94	31	419	12943
滋賀	114	146	72	178	155	155	71	145	102	7715	3415	22166
京都	408	6021	175	8132	5220	7839	4413	2610	229	28930	90799	32297
大阪	7619	7026	287	13850	11845	9540	3912	6534	4017	539195	18164	1389509
兵庫	4415	3917	146	7636	5628	6223	6730	3823	1711	291118	6825	772332
奈良	174	358	52	6931	4214	4119	3415	116	115	20968	6422	538194
和歌山	81	72	1	85	31	105	61	84	18	4113	1068	3535
鳥取	1	64	21	21	11	82		22	31	95	216	3616
島根	2	2			11	32	21		11	73	28	208
岡山	93	135	62	137	41	165	32	32	73	4215	145	13048
広島	227	166	93	2511	156	2413	62	108	85	8234	2010	237105
山口	11	31		52	12	82		24	21	14	512	3812
徳島	21	21	11	21	21	51	21	11	12	93	62	338
香川	21	21	11	145	41	114	41	11	15	201	21	6219
愛媛	51	43	2	63	33	83	41	42	21	215	51	6420
高知	62	61	1	51	13	53	51	12	24	148	87	527
福岡	213	193	72	175	2410	278	102	42	62	8329	329	25075
佐賀	1	2		42	21	31	11	11	144	32	32	99
長崎	42	62	11	21	41	92	12	54	23	53	51	4417
熊本	42	41	43	43	63	73	33	21	199	63	525	59325
大分	42	42	11	31	41	43	13	21	13	63	31	3016
宮崎	13	38	11	63	43	72		21	22	112	41	4113
鹿児島	92	62	15	145	61	93	113	42	15	182	102	8925
沖縄		62	21	31	21	21	11			42	22	224
合計	509117	607214	18157	811309	605215	831307	329111	286141	21684	2713939	863310	79512804

(備考) 外国学校出身者のための選考を除く。

大学入試センター試験及び個別学力検査において受理された出願資格が、ともに高等学校又は中等教育学校卒業（出願時見込みを含む）である者のみ各欄に含む。

4. <一般入試> 志願者・入学者 入学資格取得年別調

学部	志願者			入学者			学部	志願者			入学者		
	総数	現役 28.3卒	浪人 27.3以前卒	総数	現役 28.3卒	浪人 27.3以前卒		総数	現役 28.3卒	浪人 27.3以前卒	総数	現役 28.3卒	浪人 27.3以前卒
総合人部	518	319	199	119	61	58	医学部 医学科	330	191	139	111	68	43
	男 371	男 217	男 154	男 87	男 44	男 43		男 253	男 138	男 115	男 96	男 54	男 42
	女 147	女 102	女 45	女 32	女 17	女 15		女 77	女 53	女 24	女 15	女 14	女 1
	8	認 5	認 3	認 2	認 1	認 1	他 1	他	他 1	他	他	他	
	1	他	他 1	他	他	他	他	他	他	他	他	他	
		61.6%	38.4%		51.3%	48.7%		57.9%	42.1%		61.3%	38.7%	
文学部	614	435	179	216	145	71	医学部 人間康科 医人健科	291	187	104	142	94	48
	男 325	男 205	男 120	男 126	男 79	男 47		男 98	男 47	男 51	男 41	男 18	男 23
	女 289	女 230	女 59	女 90	女 66	女 24		女 193	女 140	女 53	女 101	女 76	女 25
	6	認 2	認 4	認 2	認 1	認 1	他 4	他	他 1	他 1	他	他 1	
	1	他	他 1	他	他	他	他	他	他 1	他	他	他	
		70.8%	29.2%		67.1%	32.9%		64.3%	35.7%		66.2%	33.8%	
教育学部	183	134	49	57	40	17	薬学部	218	145	73	84	58	26
	男 98	男 70	男 28	男 32	男 25	男 7		男 132	男 82	男 50	男 53	男 35	男 18
	女 85	女 64	女 21	女 25	女 15	女 10		女 86	女 63	女 23	女 31	女 23	女 8
	2	認 1	認 1	認 他	認 他	認 他	他 2	他 1	他 1	他	他	他	
	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	
		73.2%	26.8%		70.2%	29.8%		66.5%	33.5%		69.0%	31.0%	
法学部	821	520	301	312	191	121	工学部	2,732	1,731	1,001	941	532	409
	男 597	男 361	男 236	男 227	男 130	男 97		男 2,445	男 1,538	男 907	男 864	男 492	男 372
	女 224	女 159	女 65	女 85	女 61	女 24		女 287	女 193	女 94	女 77	女 40	女 37
	8	認 2	認 6	認 2	認 1	認 1	他 18	他 4	他 14	他 1	他	他 1	
	1	他	他 1	他	他	他	他 1	他	他 1	他 1	他	他 1	
		63.3%	36.7%		61.2%	38.8%		63.4%	36.6%		56.5%	43.5%	
経学部 経済部	610	431	179	215	145	70	農学部	867	536	331	310	146	164
	男 501	男 340	男 161	男 180	男 119	男 61		男 562	男 326	男 236	男 214	男 96	男 118
	女 109	女 91	女 18	女 35	女 26	女 9		女 305	女 210	女 95	女 96	女 50	女 46
	5	認 1	認 4	認 他	認 他	認 他	他 4	他 2	他 2	他	他	他	
	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	
		70.7%	29.3%		67.4%	32.6%		61.8%	38.2%		47.1%	52.9%	
理学部	845	558	287	310	176	134	合計	8,029	5,187	2,842	2,817	1,656	1,161
	男 716	男 469	男 247	男 279	男 159	男 120		男 6,098	男 3,793	男 2,305	男 2,199	男 1,251	男 948
	女 129	女 89	女 40	女 31	女 17	女 14		女 1,931	女 1,394	女 537	女 618	女 405	女 213
	11	認 2	認 9	認 3	認 1	認 2	他 69	他 20	他 49	他 11	他 4	他 7	
	3	他	他 1	他	他	他	他 8	他 3	他 5	他 1	他	他 1	
		66.0%	34.0%		56.8%	43.2%		64.6%	35.4%		58.8%	41.2%	

(備考) 認…高等学校卒業程度認定試験合格者
(大学入学資格検定合格者含む)
他…その他の入学資格取得者
認, 他は内数

[外国学校出身者のための選考に係る入学資格取得年別調 (外数)]

学部	志願者		入学者			
	総数	現役 H27.4-28.3卒	浪人 27.3以前卒	総数	現役 H27.4-28.3卒	浪人 27.3以前卒
法学部	21	20	1	4	4	0
		95.2%	4.8%		100.0%	0.0%
経済学部	22	19	3	5	5	0
		86.4%	13.6%		100.0%	0.0%

(教育推進・学生支援部(入試企画課))

訃報

このたび、^{そのだ} ^{たん} 藺田 坦 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に氏の略歴、業績等を紹介いたします。

藺田 坦 名誉教授



藺田 坦先生は、4月22日逝去された。享年79。

先生は昭和34年3月京都大学文学部を卒業された。同39年3月同大学大学院文学研究科博士課程を終えられたあ

と、同大学研修員、西ドイツゲーテ研究所およびチュービンゲン大学留学、京都大学教務補佐員を経て、同45年4月同大学文学部助手に採用された。昭和47年4月に大阪市立大学に移られ文学部講師、同49年4月同助教授、同58年4月同教授を務められた。昭和63年10月には京都大学に戻られ文学部助教授に就任し、平成元年11月同教授に昇任された。この間、平成元年1月に京都大学文学博士の学位を取得されている。平成12年3月に停年退職され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。退職後は龍谷大学文学部教授を経て、平成17年4月から同23年3月まで仁愛大学学長・教授を務められた。平成23年12月には日本学士院会員に選出されている。

先生はまず13世紀のドイツ神秘主義の代表的思想

家であるマイスター・エックハルトの独自の思想的徹底性ないし宗教的思弁性を追及し、宗教と哲学の接点の解明に努められた。その後、同名誉教授の関心は、哲学知と科学知の発展と連関をめぐって広義の哲学史へと広がり、それとともに、中世から近世へと移行行くより新しい時代すなわちルネサンス期の思想のうち、多様な可能性を含んだニコラウス・クザヌスが中心的な研究テーマとなった。これらの研究は、著書『〈無限〉の思惟—ニコラウス・クザヌス研究』(昭和62年)、『クザヌスと近世哲学』(平成15年)、『無底と意志—形而上学 ヤーコブ・ベーム研究』(平成27年)として纏められ、学界に至大な影響を与えられた。

エルンスト・カッシーラーの『個と宇宙—ルネサンス精神史』(平成3年)およびヤーコブ・ベーム『アウローラ—明け初める東天の紅』(平成12年)の訳業もまた、近世哲学史と宗教哲学とを兼ねて修められた同名誉教授でなくては果たしえない業績である。

(大学院文学研究科)

お知らせ

『京大広報』改訂について

学内向け広報誌『京大広報』は、創刊以来40年以上の長きにわたり発行を続けてきたところですが、次号の724号をもって改訂し、725号より装いを新たに発行することになりました。これまでの印刷物としての『京大広報』は終了し、今後は本学WEBサイト上でのPDF版による発行・閲覧となります。本学ホームページを補完し、『京大広報』のアーカイブ機能を生かして、本学WEB上だけでなく附属図書館学術情報リポジトリに登録し、記録、保存します。

また、WEB閲覧を考慮して、デザインを見直し、

紙面を2段組から1段組に変更するとともに全体として読みやすく、わかりやすいものになるよう努めてまいります。

記事は、これまで同様、本学の公式見解を周知するとともに、学内の動きを伝えるもののほか、コラム等を掲載します。引き続き、各部局、部署よりコラム執筆者の推薦やニュース、資料などの記事の積極的な寄稿をお願いします。

(企画・情報部(広報課))